

## 異性愛主義と植民地／近代ジェンダー体系

マリア・ルゴース  
鈴木 越生 訳

---

### 訳者解題

本稿はフェミニスト哲学誌 *Hypatia* に掲載された María Lugones, 2007, “Heterosexuality and the Colonial/Modern Gender System” の全訳（要旨を除く）である<sup>(1)</sup>。マリア・ルゴースは主にアメリカ合州国で活躍した、アルゼンチン生まれのレズビアン・フェミニストの社会理論家である。訳者の知る限りその著作の邦訳が発表されるのは本稿が初めてとなるため、ルゴースの紹介から始めていきたい。

ルゴースは1944年にブエノス・アイレスで生まれ、60年代に合州国へ移住し、2020年、カリブ哲学会からフランツ・ファノン賞の受賞が決まっていた76歳の年にニュー・ヨーク州で亡くなった。1972年からミネソタ州のカールトン・カレッジで哲学の教員を務めたのち、93年にニュー・ヨーク州立のビンガムトン大学に異動してからは、比較文学の教授としてラテン・アメリカとカリブ地域研究プログラムを率いるなど、多彩な教育・研究活動を行った（Micale 2020）。

ビンガムトン大学という場所は、本稿を、その背後にあった知的ネットワークとともに理解するために重要だ。当大学には、世界システム理論を立ちあげたイマニエル・ウォーラステインが1976年から社会学教授として在籍し、フェルナン・ブローデル・センターを設立した。1979年にはウォーラステインがタンザニアで知りあったジョヴァンニ・アリギも合流し、センターは世界システム理論や植民地統治と資本主義の連関を分析する研究の重要拠点となっていた<sup>(2)</sup>。そして本稿の土台となる研究を行ったアニバル・キハーノもまた、世界システム論の基礎をなしたラテン・アメリカ従属理論の形成に貢献し、このセンターに関わってきた社会学者だ（Maldonado-Torres 2025）<sup>(3)</sup>。そしてキハーノが1995年からビンガムトンの訪問教授となったため、ルゴースはキハーノと同僚として接することになったの

である。本稿の背景には、このようなビンガムトンの知的風土と、キハーノとの出会いがあると想像される。

さて、訳文の固さを別としても、本稿は、問題意識は明らかでありながら込みいった構成を取っているために、少々読みとりづらいかもしれない。その複雑さはまず、本稿が2つの異なる議論の線を縫りあわせようとしていることに起因する。1つはキハーノがラテン・アメリカの諸社会を念頭に展開した「権力の植民地性 (colonialidad del poder)」論、もう1つは合州国における非白人中心的な有色のフェミニズムズ (feminisms of color) である。本稿がそれぞれに対してどのように敬意を表しながらも介入し、どのように新しい貢献をしようとしたのか、順に見ていきたい。

権力の植民地性というキハーノの提示した概念は、植民地支配が形づくった権力の体系が、植民地統治が行政的には終わった後も継続している現状を捉えるためのものだ。その体系は、政治や人間生活の諸領域において資源や富を統制する力を誰が持つかを定める。植民地性という語を使うねらいはまず、このように、植民地統治をとおしてうみだされてきた経済・文化・政治・人間生活を組織する社会原理が、植民地行政とともに終わったのではなく、現在も生き続けている状況を指し示すことにある (Quijano and Wallerstein 1992: 550; Maldonado-Torres 2007: 243)。「ジェンダーの植民地性」という概念も同様に、植民地化とともに特定のジェンダー体系がつくられ、それが現在まで存続している状況を指し示している (Lugones 2010: 746)。

そして植民地的な社会原理は近代と呼ばれるヨーロッパ中心の資本主義世界システムの発展に不可欠であり、両者は表裏一体なのだという理解が、キハーノの議論の中核にある。植民地と近代をスラッシュで結ぶという本稿でルゴネスが採っている用語法は、このような近代と植民地の一体性を表すためのものであり、この点でキハーノの考え方を踏襲していることがわかる<sup>(4)</sup>。

加えてキハーノの議論で重要なのは、植民地性が権力の領域と同時に、なにが知識としてカウントされるか・知識をどうつくりどう獲得するかといった知識の領域をも貫いているという論点だ (訳文 pp.55-6)。ここで言う知識とは、狭義の学知だけを指すのではない。それは物事の見方、自分たちが何者かという人間理解のありようを形成し、世界認識をつくりあげる。「人種」の知識体系に顕著なように、知識は植民地的状況において、特定の人びとを優位に立たせる権力体系と結びついて作動する。

ルゴネスが問題にするのは、このように権力と不可分な知識の植民地性を捉えそこからの脱却を目指したはずのキハーノが、ジェンダーに関しては植民地／近代的知識体系の内側に留まっているという矛盾だ。キハーノは人間を異性愛的な男女に二分する父権的なジェンダー編成があることを所与の前提としているが、そのような現実と現実認識自体が植民地統

治によって作りだされたものだとしたらどうか。ルゴネスは女性に中心的役割を与える北米先住民の政治体制や、そもそもジェンダーが社会の主要な組織化の原理になっていなかったというヨルバの事例を根拠としてこのように問いかけ、植民地／近代的な想像力の外側にある人間理解や社会原理に光を当てる。

重要なのは、こうしたルゴネスの議論が植民地／近代の支配に抗する主体や植民地化以前の社会のあり方に目を向け、そこから学ぶ可能性を示している点だ。というのも、近代から現在へと続く植民地性を強調する議論は、ともすれば植民地的現実にはばかり光を当て、それを変えていく現実の潜勢力や別様の社会の可能性を十分に示せなくなってしまうからである。むろん、植民地化以前の社会を理想化しかねない本稿の傾向<sup>(5)</sup>や、地域ごとの特殊性を捨象しかねないアクロバティックな横断論法には、十分に疑問の余地がある。植民地化がそれ以前の社会のジェンダー編成をどう変化させたのかは、地域ごとの文脈のなかでより丁寧に検討されなければならない。ただしそうした検討自体、それを論じる議論の空間がまずは切りひらかれないことには始まらない。問題の考察や研究プロジェクトを「始める」、「大胆な筆致で」導入する、といった言葉がくり返される本稿からは、議論の大味さを認識しつつもとにかく新たな問題設定を明確に打ちたてんとするルゴネスの切迫感が伝わってくる。

他方で、フェミニズムに対する本稿の介入はどのようなものか。アフリカ系やラテン・アメリカ系、アジア系の女性たちの白人女性と異なる生活経験から発展してきた有色のフェミニズムに、ルゴネス自身もその一人としておおいに共感している。そのうえで本稿が別様の視点を提示するのは、とりわけ交差性（intersectionality）の概念に対してである<sup>(6)</sup>。黒人女性特有の被害や抑圧の経験が「黒人」／「女性」いずれのカテゴリに光を当てても照らされない、という問題意識から出発する交差性の概念は、その経験を複数のカテゴリの交差点にあるものとして浮き彫りにしようとする。だが1つ1つのカテゴリを道路に見立て、それが交差する、という比喻の順序によく表れているように、交差性はカテゴリをある程度自明の前提とする。道路はすでに敷かれているのだ。そしてこの概念化は、反本質主義と区別して意図的に選ばれたものであった。いくらカテゴリを構築されたものと言いつつても、厳然と存在している「人種」や「性別」による差別や抑圧は消えない。社会正義を志向する交差性論は、こうした実践的な問題意識から、カテゴリを極めてリアルなものとする（Lugones [2005] 2014: 74）。

ルゴネスはこの問題意識を重視しつつも、カテゴリの本質化を批判したからといって、カテゴリが持つ現実的な力の認識が妨げられるわけではないと反論する（Lugones [2005] 2014: 75）。カテゴリが構築物であると言うことは、それが現実的な存在感や力を持たないと言うことにはならない。特定の歴史物語が当然無謬の「史実」として社会に流通するように、

構築されたものは、それが社会で広められ「常識」として受け入れられることで強力な現実性を帯びる。肝要なのはカテゴリが構築物だと言うか否かではなく、どう言おうとそれがわたしたちの社会生活に厳然たる影響を及ぼす状況を前に、カテゴリがいかにしてそのような力を得るのかを解明することだ。この課題は、黒人女性を劣位に置き白人男性を優位に立たせる権力や知識の体系を明るみに出す作業を要請する。ここで問題となるのは個々のカテゴリの水準ではなく、その力をうみだす権力-知の水準であり、それはまさにキハーノが捉えようとしたものだ。本稿はこうした論理から、交差性論がキハーノの議論から学ぶところがあるのではないかと示唆している。

以上のような二重の介入を行い、異なる思潮の結節点に立つ本稿には、多方面に広がる豊かなアイデアが詰めこまれている。キハーノをはじめとする（脱）植民地性論への入口として、あるいは交差性概念を再考するための糸口として活用できる<sup>(7)</sup>ことはもちろん、翻って日本の主流フェミニズムにおけるジェンダー概念の固さ・狭さへの批判的介入にも役立てうるだろう。読者それぞれの活用をしていただければ幸いである。

以下、訳文中の注釈は、() なしの注が原注、() 付きの注が訳注である。また、原文では文献注の人名が省略される箇所が多いが、日本語にすると参照しづらくなるため、人名を補っている。この場合煩雑になるため、訳者による補足であることを逐一 [] で示していない。文献注や参考文献の表記法は、邦訳掲載誌の規定に合わせて原文から変更するとともに、原文で不正確あるいは不完全な箇所は修正した。

## 注

- (1) Copyright © 2020, Cambridge University Press.
- (2) より近年について言えば、当センターには『生命の網のなかの資本主義』(Moore 2015=2021) で知られる世界システム理論の後継者ジェイソン・ムーアが所属していた。しかしその後、2020年には閉鎖に至った。
- (3) キハーノは渡米以前の1992年の時点で、資本主義世界経済がアメリカ大陸抜きには存在しえなかったと論じる、ウォーラーステインとの共著論文を發表している (Quijano and Wallerstein 1992)。
- (4) より広く言えばこうした理解や用語法は、近代性／植民地性学派と呼ばれるラテン・アメリカの系譜と関連づけられる。キハーノや哲学者エンリケ・ドゥッセル、文化理論家ウォルター・ミニョロの仕事を中心とするこの学派については、Escobar (2007) や長谷川 (2019: 163-72) がその要点をまとめている。
- (5) 廣瀬純は現代ラテン・アメリカの先住民フェミニズムを展望する論文のなかで、植民地化

以前の先住民社会にも一種の父権制はあったのであり、植民地化はそれを強化したのだと捉える人類学者リタ・セガートの議論を紹介し、ルゴネスや、ルゴネスの依拠するオイェロンケ・オイェウミの立場と対比させている（廣瀬 2021: 61-2, 65）。ただし植民地の男性が植民者と結託して女性の地位低下に一役買った、という論点はルゴネスも強調するところであり、その点ではセガートの議論と共通する。

- (6) 以下では本稿の手短なコメント（訳文 pp.56-7）を補足するため、そこで参照されている Lugones ([2005] 2014) も含めて議論をまとめる。
- (7) 後者の好例として Carastathis (2016) が挙げられる。

### 参照文献

- Carastathis, Anna, 2016, “Intersectionality and Decolonial Feminism,” *Intersectionality: Origins, Contestations, Horizons*, Lincoln; London: University of Nebraska Press, 199-232.
- Escobar, Arturo, 2007, “Worlds and Knowledges Otherwise: The Latin American Modernity/Coloniality Research Program,” *Cultural Studies*, 21(2-3): 179-210.
- 長谷川ニナ, 2019, 「現代ラテンアメリカにおける文化・文学研究の新潮流」浅香幸枝編『交差する眼差し——ラテンアメリカの多様な世界と日本』行路社, 163-82.
- 廣瀬純, 2021, 「探掘主義と家父長制——現代ラテンアメリカのフェミニズム」『思想』(1162): 60-77.
- Lugones, María, [2005] 2014, “Radical Multiculturalism and Women of Color Feminisms,” *Journal for Cultural and Religious Theory*, 13(1): 68-80.
- , 2010, “Toward a Decolonial Feminism,” *Hypatia*, 25(4): 742-59.
- Micale, Jennifer, 2020, “Thought and Practice: María Lugones Leaves a Global Legacy,” *BingUNews*, August 7, (Retrieved January 9, 2026, <https://www.binghamton.edu/news/story/2580/thought-and-practice-maria-lugones-leaves-a-global-legacy>).
- Maldonado-Torres, Nelson, 2007, “On the Coloniality of Being,” *Cultural Studies*, 21(2-3): 240-70.
- , 2025, “Aníbal Quijano and the Decolonial Turn,” *Theory, Culture & Society* doi: 10.1177/02632764241303701 .
- Moore, Jason W., 2015, *Capitalism in the Web of Life: Ecology and the Accumulation of Capital*, London; New York: Verso. (山下範久監訳, 山下範久・滝口良訳, 2021, 『生命の網のなかの資本主義』東洋経済新報社.)
- Quijano, Aníbal, and Immanuel Wallerstein, 1992, “Americanness as a Concept, or the Americas in the Modern World-System,” *International Social Science Journal*, 44(134): 549-57.

\*\*\*\*\*

〔本稿で〕わたしは、植民地権力の作動においてジェンダーが人種と融合する際、その鍵となる部分として異性愛主義（heterosexualism）を考え始める枠組みを、理論－実践的なやり方で提示していく。植民地主義は被植民者に、植民地化以前からあるヨーロッパ的なジェンダーの編成を押しつけたわけではない。それは新しいジェンダー体系を押しつけ、被植民者の男女に、白人のブルジョワ植民者のためのものとはおおいに異なる編成をうみだしたのだ。したがって、植民地主義はいくつものジェンダーを導入し、ジェンダーそのものを植民地的概念として、そして生産関係、所有関係、世界観や知覚の仕方を織りなす様式として新たに持ちこんだ。だがわたしたちは、アニバル・キハーノが「権力の植民地性（the coloniality of power）」と呼ぶもの（Quijano 2000a, 2000b, 2001-2002）を理解しない限り、このジェンダー体系を理解することはできない。ジェンダーの編成を歴史化する理由は、この歴史を知らなければ、わたしたちは分析を父権制（patriarchy）に集中し続けてしまうからだ。すなわち、性を二分し、階層的で抑圧的な、男性優位に依拠したジェンダー編成に、〔それを生じさせる〕仕組みの明確な理解がないまま集中してしまう。〔だが実際には〕その仕組みがあるために、異性愛性、資本主義、人種的階級化を互いに切り離しては理解できないのである。異性愛主義的な父権制はこれまで、非歴史的な分析枠組みであり続けてきた。植民地／近代ジェンダー体系（colonial/modern gender system）の誕生とグローバルな植民地資本主義の誕生の関係を、グローバル権力の体系にとって権力の植民地性がいかに中心的であったかとともに理解することは、現在わたしたちの生活が組織されるさまを新たに理解しなおすことになる。

ジェンダーと異性愛主義を歴史化するこの試みは、したがって、解放的／脱植民地的なプロジェクトに携わってきたわたしや他の人びとに概念的かつ政治的な固い障壁として立ちふさがってきたものを、動かし、押しのけ、複雑化する試みである。解放的な可能性を脱植民地的な可能性として概念化し、発動させることに対する障壁だ。植民地／近代ジェンダー体系の明るい側面を強調する解放的な可能性は、生活の抑圧的な組織化を拒否するのではなく、むしろ肯定してしまう。ホワイト・フェミニズムの理論と実践、とくにフェミニスト哲学の多くでは、ジェンダーとセクシュアリティを中心に据える分析に人種を深く重ねこむことが、長らく行われてこなかった。それを「ホワイト」フェミニズムの理論・実践と呼ぶとき、わたしは注意を払ってそうしている。〔というのも、〕この主張には余分な重複が含まれるのではないかと疑うこともできる〔からだ〕。つまりフェミニズムというものの自体が、わたしが植民地／近代ジェンダー体系の明るい側面と呼ぶものから生じるジェンダーとジェンダー

化されたセクシュアリティの感覚に否応なく絡めとられているように思われるため、そもそも白人中心なのだと。しかしこれはもちろん、ジェンダーを植民地的概念とみなす理解の内側から出てくる結論だ。だがわたしはこの結論に、いまだジェンダーに関する研究の中心になっていない政治／実践／理論的な道を歩いて行きついた。それは、権力の植民地性を真剣に捉えることに特徴づけられる道だ。本稿でのちに明確化するように、〔逆に〕権力の植民地性を真剣に捉えてきた人びとの多くがジェンダーを一般化する傾向にあったことも、政治的に重要である。この立場もまた、抑圧的な植民地ジェンダー編成、抑圧的な生活の組織化を強固にするものだ〔からだ〕。

したがってわたしは一方で、多くのフェミニストの分析で持続する無関心を理解できるようなやり方で、人種・階級・ジェンダー・セクシュアリティの交差（intersection）を探究することに関心がある。有色女性（women of color）や第三世界の〔複数の〕フェミニズムズ（feminisms）は一貫して、この人種・ジェンダー・階級・セクシュアリティの深い折り重なりへの無関心を批判する道を示してきた。わたしが導入する枠組みは全面的に第三世界フェミニズムズに根ざし、その内側から生じている。この枠組みによってわたしたちは、厳しいが、望むらくは鼓舞するような問いを投げかけることができる。それらの問いは、こうした複雑性の度合いにおいて理解される抑圧に対し、抗うことを鼓舞しようとする。わたしたちが異性愛主義について、その内側から問える2つの決定的に重要な問いは、以下のとおりだ。〔第一に、〕異性愛性が植民地近代のジェンダー体系全体で暴力的に行使され、世界規模の権力の体系を築くとき、それが単に規範的というだけでなく絶えず不条理なものとして〔現れることを〕、どのように理解するか。〔第二に、〕不自由な人びとの身体に、その身体を権力の責め苦を受けた物体として構成すべく考案されたさまざまなパターンによってアクセスすることで、肉体を多様に印づける執拗に暴力的な支配、この支配と結びついた異性愛主義の意味そのものを理解するにはどうすればよいか。本稿で着手する研究では、これらの問いに応え始めるための最初の素材を提供する。わたしは、植民地／近代ジェンダー体系と権力の植民地性を肯定する女性たちのあいだでは、いかなる連帯やホモエロティックな愛も可能だと思わない。また、権力の植民地性と植民地／近代ジェンダー体系の折り重なりを無視する国境を越えた知的・実践的研究も、このグローバルな権力体系を肯定していると考え。だが〔実際のところ〕わたしは何度も、多くの場合不信とともに、政治的意識を持つ白人の理論家たちがいかにジェンダーを父権制の観点から単純化するかをみてきた。そのため〔本稿では〕、観点そのものを変えることで異性愛主義の議論を進ませようと試みているのである。

〔他方で〕わたしは、男性たちの無関心を理解できるように、人種・階級・ジェンダー・セクシュアリティの交差を探究することにも関心がある。男性、なかでもわたしたちの闘い

にとってより重要な、劣った存在として人種化されてきた男性たちが示す、有色女性に影響を及ぼす体系的暴力への無関心だ<sup>1</sup>。わたしはこの無関心がつくられるさまを理解することで、それを解放的闘争に関わっていると主張する人びとに否応なく認識できるものにした。この無関心はじわじわと害をもたらす。というのもそれは、わたしたち自身の自由・一体感 (integrity)・幸福を求める有色女性の闘いと、共同の一体性へ向けた相互に関係する闘いの道中に、多大な障壁をもたらすからだ。共同の一体性は解放へ向けた共闘の中軸をなすがゆえに、決定的に重要である。この無関心は日常生活の水準でも、抑圧・解放双方の理論化の水準でも見られる。それはわたしには、人種・ジェンダー・階級・セクシュアリティの分類的な<sup>2</sup>切り離しのために〔有色女性に対する〕暴力が見えていない、というだけのことでないように思える。つまりそれは、分類的な切り離しをとおして認識論的に見えない部分がある、というだけの問題には思われない。

有色のフェミニスト (feminists of color) は、これらのカテゴリの交差に認識論的な視座の照準を合わせたとき、暴力的な支配や搾取という観点でなにが露わになるかを明らかにしてきた<sup>3</sup>。しかしそれは、自身が暴力的な支配や搾取の標的とされてきた男性たちの内に、自分たちが有色女性に対する暴力的な支配に加担している、あるいはそれと共謀しているという認識を生じさせるには十分でなかったようだ。とりわけ、グローバルな支配の理論化は、そうした類の裏切りや共謀が認識され抵抗される必要などないかのように進み続けている。

ここでは、十分に結びつけられるのを見たことがない2つの分析枠組みを一緒にすることで、この検討を突き進めていく。わたしが言及しているのは、一方で、ジェンダー、人種、植民地化についての、第三世界・有色女性のフェミニストによる重要な研究だ。これらの研究は、そうと限られるわけではないものの、批判的人種理論家を含め、とりわけこれらのフェミニストたちによってなされてきた。その著作は交差性 (intersectionality) の概念を強調し、非白人女性が女性の名のもとに解放闘争から歴史的・理論-実践的に排除されてきたことを明るみに出してきた<sup>4</sup>。もう一つはキハーノが導入し、その研究の中心にある、権力の植民地性という枠組みだ (Quijano 2000a, 2000b, 2001-2002)<sup>5</sup>。これら2つの分析の線を一緒にすることで、わたしが暫定的に「植民地/近代ジェンダー体系<sup>(1)</sup>」と呼ぶものにたどり着ける。このジェンダー理解はどちらの枠組みにもおおまかには含みこまれているが、それとわかる形で明確化されていないか、あるいは、このジェンダー体系に付随する複雑さの射程・結果を明らかにするのに必要だとわたしが考える方向で明確化されてはいない。この植民地/近代ジェンダー体系を大胆な筆致で、かつあらゆる細かな生きられた具体性において明確化することで、わたしたちになにが押しつけられているかを把握できるようになる。加えて、この体系の長期にわたる、広い意味での根本的な破壊性を見ることができる。これを書く目的

は、植民地／近代ジェンダー体系がわたしたち——有色の女性と男性どちらも——を、存在のあらゆる領域で従属させる手段となっているさまを可視化させることだ。だが、実践的な連帯を決定的に妨害しているものを可視化させることもまた、このプロジェクトの目的である。わたしの目的は、このジェンダー体系へのわたしたちの忠実さを理解し、読みとり、知覚する方法を提供することだ。わたしたちは、このジェンダー体系を拒否するよう互いに呼びかけ、共同関係を変革させる立場に自分たちを置かねばならない<sup>6</sup>。その手始めとなる本稿は、キハーノのモデルを提示する。わたしはそれを複雑化させていくが、このモデルは人種とジェンダーが織りあわさってうまれる過程を理解するためのよい土台を——構造的な軸の論理において——与えてくれる。

### 権力の植民地性

キハーノは人種とジェンダーの交差を、広い構造的観点から考えている。したがって、その交差をキハーノの観点から理解するためには、グローバルでヨーロッパ中心的な資本主義権力に関するキハーノのモデルを理解する必要がある。キハーノは、社会的行為者が「人間存在の4つの基本領域、すなわち性 (sex)・労働・集合的権威・主観性／間主観性、それらに関わる資源と生産物」(Quijano 2001-2002: 1)の統制をめぐる争うなかで、あらゆる権力が支配・搾取・コンフリクトの諸関係において構造化されると理解する。人種<sup>7</sup>とジェンダーはいずれも、このモデル (patrón)<sup>8</sup>のなかで意味づけられる。グローバルでヨーロッパ中心の資本主義権力は、とくに2つの軸をめぐる組織される。権力の植民地性と近代性だ (Quijano 2000b: 342)。これらの軸はそれぞれの存在領域の統制をめぐる争いを、権力の植民地性と近代性が各領域における支配の意味と形態をすっかり満たしてしまうように秩序立てる。そのためキハーノにとって、「性的なアクセス、それに関わる資源と生産物」の統制をめぐる争い／闘いが性／ジェンダーの領域を定義し、争いは植民地性と近代性の軸をめぐる組織化されると理解できる。

これは、ジェンダーという領域の抑圧的な植民地／近代的構築の理解として、あまりに狭い。キハーノはまた、性とそれに関わる資源・生産物の統制をめぐる争いの、父権的・異性愛的な理解を前提としている。キハーノはジェンダーとはなにかについての、グローバルでヨーロッパ中心的な資本主義的理解を受けいれている。キハーノの枠組みのこうした特徴は、非白人被植民者の女性たちがどのように従属させられ力を奪われてきたかを覆い隠す助けになってしまう。この枠組みの諸前提を明るみに出すことで、[ジェンダー]編成の異性愛的・父権的性格自体を抑圧的なものとして捉えることができる。[後で論じていくように、]ジェ

ンダーは性的なものを含め、社会編成を組織化するとは限らない。そしてジェンダー編成は異性愛的とも、父権的とも限らない。つまり歴史上の事実として、そうとは限らないのだ。植民地／近代ジェンダー体系の組織化のこうした特徴——生物学的な二型性(dimorphism)<sup>(2)</sup>、諸関係の父権的で異性愛的な組織化——を理解することは、「人種」の線に沿って変わるジェンダー編成を理解するために、決定的に重要である。生物学的な二型性、異性愛主義、父権制はすべて、わたしがジェンダーの植民地／近代的組織化の明るい側面と呼ぶものの特徴だ。支配的な傾向として、これらはジェンダーの意味をめぐる論述のなかでおおいに書き記されている。キハーノは、自身がこの支配的なジェンダーの意味づけを受けいれていることに気づいていないようだ。こうした主張をするにあたってわたしは、わたしが植民地／近代ジェンダー体系と呼ぶものの中心にある権力の植民地性に関するキハーノの理解を保持しながらも、そのアプローチを広げ、複雑化させることを目指している。

権力の植民地性は、人種概念という観点から全世界の人びとを分かち、基礎的で普遍的な社会階級分類(social classification)を導入する(Quijano 2001-2002: 1)。人種の発明は、それが支配をとおして確立された優等・劣等の諸関係に取ってかわるために、決定的な転換点である。それは人間性と人間関係を虚構的に、生物学的な観点から捉えなおす。重要なのはキハーノが提供しているのが、キハーノが「社会階級のヨーロッパ中心的理論」(Quijano 2000b: 367)と名づけるものにと取ってかわる、社会階級分類の歴史理論だということだ。このような〔理論構築〕作業によって、権力の植民地性について考える概念的な余地がうまれる。この作業によって、グローバル資本主義について理解する際、その中心に人種の観点からの世界人口の階級化があることを考える概念的な余地がうまれる。そしてまた、労働、性、集合的権威、間主観性の各要素を権力関係に先立つものとして理解するのではなく、それらの統制をめぐる歴史的争いを長期にわたる過程のなかで発達してきたものとして理解する概念的な余地がうまれる。グローバルでヨーロッパ中心の資本主義権力のモデルを構成する諸要素は、ばらばらにあるのではなく、どれもそのモデル<sup>(3)</sup>を構成する過程に先立つことはない。実際のところ、これらの要素を形而上的に先立つものであるかのように、神話的に見せかけることが、ヨーロッパ中心的グローバル資本主義の認知モデルの重要な側面なのだ。

この社会階級分類を構成するなかで、植民地性は社会的存在のあらゆる側面に染みわたり、新しい社会的・地理文化的アイデンティティをうみだす(Quijano 2000b: 342)。「アメリカ」と「ヨーロッパ」は、そうした新しい地理文化的アイデンティティの一つである。「ヨーロッパ人」、「インディアン」、「アフリカ人」は「人種的」アイデンティティに入る。この階級分類は、「植民地支配の最も深く、最も長く続く表現」(Quijano 2001-2002: 1)である。ヨーロッパ植民地主義の拡張とともに、この階級分類は全世界の人びとに押しつけられた。以降それ

は、社会的存在のあらゆる領域に浸透し、物質的・間主観的な社会的支配の最も効果的な形態をつくりだしてきた。したがって、植民地性とは人種的な階級分類だけを指すのではない。それは包括的現象である。というのも植民地性は権力体系の軸の1つであり、それゆえに性的アクセス、集合的権威、労働、主観性／間主観性のあらゆる統制と、それらの間主観的関係の内側からなされる知識生産に染みわたっているからだ。あるいは別の言い方をすれば、性、主観性、権威、労働のあらゆる統制は植民地性を軸としてつなぎ合わせられる。キハーノが用いる「構造軸 (structural axis)」の論理をわたしが理解するところでは、軸として機能する要素は、人間存在のその特定の領域をめぐる統制との関連で権力関係が取るあらゆる形態を構成し、それによって構成される。最後に、キハーノは、植民地性は植民地主義と関連しているが別物だと明言している。後者は必ずしも人種主義的な権力関係を含まないからだ。〔とはいえ〕植民地性の誕生と、世界中にわたるその長く深い広がり、植民地主義と緊密に関連している (Quijano 2000b: 381)。

キハーノによる、グローバルでヨーロッパ中心の資本主義権力のモデルにおいて、資本主義とは次のような事態を指す。すなわち、「労働あるいは搾取、奴隷制、強制労働、小規模で独立した商業生産、賃金労働、互酬性の、歴史的に知られたあらゆる形態の統制が、資本－賃金労働関係の覇権下で構造的につなぎ合わせられること」(Quijano 2000b: 349)だ。この意味で、労働の統制をめぐる諍いの構造化は、断続的である。つまり、資本／賃金関係のモデルが支配的であるとはいえ、グローバルでヨーロッパ中心の資本主義下での労働関係がすべてこのモデルに該当するわけではない。賃金労働がほとんど白人のヨーロッパ人のみに限られてきたという、権力の植民地性の射程を初めから見定めておくことが重要だ。分業は徹底的に人種化され、地域によって異なる労働が割りあてられた。ここにおいてわたしたちは、労働と人種を全面的に編みこむものとして、労働の植民地性を見出すのだ。

キハーノは近代性 (modernity) <sup>(4)</sup>、つまりグローバルでヨーロッパ中心の資本主義のもう1つの軸を、「植民地主義・植民地性の経験と資本主義の必要性の融合であり、ヨーロッパ中心の覇権下での間主観的支配関係の特殊な世界をうみだす」(Quijano 2000b: 343)ものとして理解する。近代性を特徴づけるにあたってキハーノは、なにかを知る特定の方法がうみだされることに焦点を置いた。合理的というラベルが貼られたその方法は、この世界的な権力体系の主な覇権的中心 (オランダとイングランド) における、17世紀以降の主観的世界から生じた。この知識獲得の方法はヨーロッパ中心的である。ヨーロッパ中心主義〔という語〕によってキハーノは、ヨーロッパ人だけでなくヨーロッパ中心の世界の、つまり世界資本主義の覇権下で教育を受けた人びとの認知的視座を理解している。「ヨーロッパ中心主義は、この権力モデルの内側にいる人びとの経験を自然なものとする」(Quijano 2000b: 343)。

この知識獲得方法の生産は、資本主義の認知的要求と、植民地性のアイデンティティ・関係と世界資本主義権力の地理文化的分配の自然化によって導かれてきた。資本主義の認知的要求は「人びとと自然、それらと知識との関係、とくに生産手段の所有を統制すべく、知る人に応じて知りうるものを計測、数量化、外部化（または客体化）すること」（Quijano 2000b: 343）を含む。この知識獲得方法が資本主義世界全体で、唯一妥当な合理性として、近代性の象徴として押しつけられてきた。

ヨーロッパは世界のその他を植民地化した世界資本主義の中心としてこの権力モデル以前からあり、それゆえ、人類の直線的・一方向的・継続的な道において最も進んだ時点なのだと、神話的に理解された。人間性の観念が統合され、それによって世界人口は2つの集団に分けられた。優等と劣等、合理的と非合理的、未開と文明、伝統と近代の2つである。未開 (*primitive*) とは進化の時間という観点からみた人類史において、より以前の時代を指した。ヨーロッパは植民地的なグローバル資本主義以前から存在し、継続的・直線的・一方向的な道においてとても高次元に達したかのごとく、神話的に考えられるようになった。したがってこの神話的な出発点から、世界の他の人間たちは征服によって支配されたのでも富や政治権力の点で劣っているのでもなく、人類史、この一方向の道における前時代の段階にあるものとして、神話的に考えられるようになった。それが「未開」という特徴づけの意味である (Quijano 2000b: 343-4)。

このようにしてわたしたちは、キハーノのモデルにおいてグローバルでヨーロッパ中心の資本主義を構成する諸要素が、構造的にかみ合うさまを見ることができる。近代性と植民地性は、労働の組織化の複雑な理解を与えてくれる。それらによってわたしたちは、分業と知識生産の徹底的な人種化がかみ合うさまを見ることができる。このモデルは不均質さと断続性を許容する。キハーノは、構造とは閉じられた全体ではないと論じている (Quijano 2000b: 355)。

さてわたしたちはいまや、人種とジェンダー<sup>9</sup>の交差性という問いに、キハーノの観点からアプローチする段階にいる。わたしは、「構造軸」は交差性以上であり以下でもあると考える。交差性は、ジェンダーや人種といったカテゴリが互いに別々に概念化されては見えてこないものを明らかにする。カテゴリを交差させるという動きは、どちらのカテゴリに関しても支配され、被害を受けている人びとを可視化する難しさに動機づけられたものだ。資本主義的なヨーロッパ中心の近代においてはあらゆる人が人種化されジェンダー化されているとはいえ、誰もが人種やジェンダーに関して支配され、被害を受けているわけではない。キンバリー・クレンショーをはじめとする有色女性フェミニストたちが論じてきたのは、これまでカテゴリは均質で、集団のなかの支配的な人びとを標準として選びだすものとして

理解されてきた、ということだ。つまり女性〔というカテゴリ〕は白人のブルジョワ女性を、男性〔というカテゴリ〕は白人のブルジョワ男性を、黒人〔というカテゴリ〕は黒人の異性愛男性を選びだす、などというように。〔だが〕そうすると、カテゴリ的分離の論理が有色女性に対する暴力のように交差点にあるものを歪めさせるということが、論理的に明確になる。カテゴリの構築を前提とすると、交差は有色女性〔という存在〕を構築し損ねる。したがって、なにが見えていないのかを交差性〔の概念〕が示したとたんに、分離可能性を避けるために交差の論理を再考するという課題が現れる<sup>10</sup>。ジェンダーと人種を〔交差しているのではなく〕相互に編み合わされ、あるいは融合しているものと捉えるとき初めて、わたしたちは本当に有色女性を見出すのである。

〔対して〕構造軸の論理はジェンダーを、権力の植民地性によって構成され、それを構成しているものとして示す。その意味で、キハーノのモデルにジェンダー／人種分離可能性はない。キハーノはこの論理を正しく受けとめているとわたしは考える。だが植民地性の軸は、ジェンダーのあらゆる側面を拾いだすのに十分ではない。ジェンダーのどの側面が示されるかは、モデルのなかでジェンダーが実際どのように概念化されるかにかかっている。このモデルにおいて、ジェンダーはキハーノが「存在の基本領域」と呼ぶ「性、それに関わる資源と生産物」(Quijano 2000b: 378)の組織化の内に含まれているようだ。つまりこの枠組みのなかでジェンダーの説明はあるものの、それ自体として詳しく検討されてはおらず、その説明はあまりに狭く、あまりに生物学化されている。というのもそれは、性の二型性、異性愛性、父権制による権力の分配などを前提としているからだ。

わたしが読んだキハーノの著作のなかにジェンダーの特徴づけは見つからなかったが、わたしにはキハーノは、ジェンダーの差異が性とそれに関わる資源・生産物の統制をめぐる争いのなかで構成されると示唆しているように思われる。差異はこの統制が組織化される方法をとおして形づくられる。キハーノは性を、社会的カテゴリとして作りあげられる生物学的属性<sup>11</sup>として理解する。キハーノは性の生物学的な性質を、個々に異なる生物学的属性を含まない表現型と対比させている<sup>(5)</sup>。〔つまり〕一方で、「人の肌の色、目や髪の色は生物学的構造となんの関係もない」(Quijano 2000b: 373)。他方で性別は、キハーノにとって問題なく生物学的であるようだ。キハーノは「ジェンダー関係の植民地性」<sup>12</sup>、つまり権力の植民地性を軸としたジェンダー関係の秩序立てを、以下のように特徴づけている。

1. 植民地世界全体で、各ジェンダーの性的なふるまいの規範と公式的－理想的パターン、そして結果的には「ヨーロッパ人」の家族の組織化パターンは、「人種的」階級分類に直接に依拠していた。すなわち、ヨーロッパ中心の世界全体に

における男性の性的自由と女性の貞節は、アメリカの「黒人」女性と「インディアン」、アフリカの「黒人」女性、他の従属させられた世界のその他の「有色人」に対する白人男性の自由な——つまり売春のように金銭が支払われてはいない——アクセスと表裏一体だった。

2. その代わりにヨーロッパでは、女性の売春がブルジョワの家族パターンに対応していた。
3. 家族の一体性と統合は、ヨーロッパ中心の世界におけるブルジョワ家族モデルの軸として押しつけられたものだが、「非白人」の「人種」における親-子単位の継続的な解体と対応していた。これらの人びとは商品というだけでなく「動物」という財産として所有され、分配されえたのである。このことは、とくに「黒人」奴隷の場合に当てはまる。というのも、「黒人」奴隷に対するこの支配形態はより目に見える形で、直接的で、長く続くものだったからだ。
4. ブルジョワ家族の規範と公式的-理想的価値の特徴的な基礎をなす偽善は、以来これまで、権力の植民地性にとって馴染みのないものではない。(Quijano 2000b: 378、引用者による翻訳)

この複雑で重要な引用からわかるように、キハーノの枠組みはジェンダーを性とそれに関わる資源・生産物の組織化に限定しており、〔その枠組みから判断すると、〕キハーノは誰が〔性的〕アクセスを統制し誰が資源として構成されるかを前もって想定しているようだ。〔つまり、〕キハーノは性の統制をめぐる諍いが男性間の諍いであり、女性と想定される資源の男性による統制をめぐるものだという事を、当然視しているようである。男性は、性的な出会いにおいて資源として理解されないようだ。〔逆に〕女性は、性的なアクセスの統制を求めて諍いを起こすとは考えられていない。両者の差異は、社会が再生産の生物学をどのように読みとるか、という観点から考えられている。

## インターセクシュアリティ

「定義のジレンマ」においてジュリー・グリーンバーグは、法制度が個人を特定の人種／性別カテゴリに割りあてる権能を有していることを教えてくれる<sup>13</sup>。すなわち「いまだに、性は二分されるもので、生物学的要因の分析によって容易に判別できると想定されている。その反対の知見を示す人類学や医学の研究があるにもかかわらず、社会はすべての個人が男性か女性にきれいに分類されうる、曖昧さのない二項的性別パラダイムを前提としている」

(Greenberg 2002: 112)。グリーンバーグは、世界人口の1～4%がインターセックスだという事実にもかかわらず、合州国の歴史をとおして法はインターセックスの人びとを認め損なってきたと論じる。というのも、インターセックスの人びとは曖昧さのない性別のカテゴリにきれいに収まらないからだ。「こうした人びとは伝統的に男性と結びつけられる生物学的指標と、伝統的に女性と結びつけられる生物学的指標を有している。法がどのように男性、女性、性別の語を定義するかは、これらの個々人に重大な影響を与える」(Greenberg 2002: 112、強調は引用者)。

この割りあては、生物学的な性別として理解されるものが、社会的につくられていることを明らかにする。19世紀後半から第1次世界大戦まで、再生産機能は女性の本質的な特徴だと考えられた。卵巣の有無が、性別の最終的な基準だった(Greenberg 2002: 113)。しかし「誰かの『公式な』性別の確立」には、数多くの要因が介入する。すなわち、染色体、生殖腺、外部形態、内部形態、ホルモン・パターン、表現型、割りあてられた性別、性別の自認だ(Greenberg 2002: 112)。現状では染色体と生殖器が性別の割りあてに関わるが、そのやり方は、生物学がまったくもって解釈に委ねられ、それ自体外科的な方法で構築されていることを明らかにする。

「不適格な」ペニスを持つXY染色体の幼児は、女性に転換されなければならない。なぜなら社会が、男性性の本質は膣を貫き立小便をする能力があることだと信じているからだ。ところが「適格な」ペニスを持つXXの幼児は、女性の性別を割りあてられる。なぜなら社会と医学界の大多数が、女性性の本質は満足のいく性交ができることよりも、子どもを産む能力があることだと信じているからだ。(Greenberg 2002: 114)

インターセックスの人びとは多くの場合、外科手術あるいはホルモンによって男性か女性に転換される。これらの要因は、公的な書類に載る性別の割りあてを変える権利や、性別に基づく雇用差別の主張をする能力、結婚する権利に関わる裁判において考慮に入れられる(Greenberg 2002: 115)。グリーンバーグは、各裁判における性別割りあての決定の複雑さと多様性を報告している。法はインターセックスの状態を認めない。法は一定の書類において性別の自認を許すものの、「法制度は大半の場合、性は二分され、生物学的要因を分析することで容易に判別できるのだ、という伝統的な想定に基づいて性別を割りあて続けている」(Greenberg 2002: 119)。

グリーンバーグの研究によって、キハーノが提示するモデルにおける重要な想定を指摘す

ることができる。このことが重要なのは、性的な二型性が、植民地／近代ジェンダー体系の「明るい側面」とわたしが呼ぶものの重要な特徴であり続けてきたからだ。「暗い側面」の人びとは、必ずしも二型的には理解されなかった。植民者は性的な恐れから、アメリカ先住民を、大きなペニスと母乳の出る乳房を持つ両性具有あるいはインターセックスとして思い描いた<sup>14</sup>。だがパウラ・ガン・アレン（Allen 1986/1992）をはじめとする論者たちが明らかにしてきたように、インターセックスの人びとは植民地化以前の多くの民族社会において、二通りの性別へと同化されることなく認められていた。植民地主義とヨーロッパ中心のグローバル資本主義における性とジェンダーの組織化の射程を理解するには、植民地化がもたらした変化を考慮することが重要である。ヨーロッパ中心のグローバル資本主義が性的な二型性を白人の男女にしか認めなかったのであれば、性の分割が生物学に基づいていると言えないことは確かだ。生物学〔的性割り〕を装いや主観によって訂正することは、「ジェンダー」が「生物学的な」特徴に先立ち、それを意味づけていることをはっきりと表している。性的差異の自然化は、キハーノが「人種」の場合において指摘する科学の近代的利用の、また別の産物なのである。あらゆる異なる伝統がインターセックスの人びとを〔女性か男性へと〕正し、標準化するわけではない。したがって他の諸前提と同様に、性的な二型性がどのようにグローバルでヨーロッパ中心の資本主義による支配／搾取に役立ってきたのかを問うことが重要だ。

### ジェンダー化されていない平等主義と女性統治制の平等主義

グローバルでヨーロッパ中心の資本主義が植民地化によって打ちたてられたことで、ジェンダーの差異が、そのようなものがなかった地域にも導入された。オイエロンケ・オイエウミ（Oyéwùmí 1997）は、ヨルバ<sup>6</sup>社会に押しつけられた抑圧的ジェンダー体系が、再生産の組織化〔のされ方〕を変える以上の影響をもたらしたことを示した。オイエウミの議論は、植民地主義が押しつけたジェンダー体系の範囲が、生活のあらゆる側面における女性の従属化を含みこんでいることを示す。であれば、グローバルでヨーロッパ中心の資本主義におけるジェンダー化についてのキハーノの理解は、あまりに狭いということになる。〔他方で〕アレンは、多くのネイティブ・アメリカンの民族〔社会〕が母権的（matriarchal）で、2つ以上のジェンダーを認め、「第三の」ジェンダー化や同性愛を肯定的に評価し、ジェンダーをヨーロッパ中心の資本主義が押しつけた従属化の観点よりも平等主義的な観点から理解していた、と論じた。ガン〔・アレン〕の著作によって、ジェンダーの差異が〔現在一般に想定されるよりも〕ずっと包括的で、生物学に依拠してはいなかった〔場合がある〕ことがわ

かってきた。アレンはまた、知識の女性統制的な (gynecratic) 構築と、近代の知識生産に抗する「現実」理解のアプローチを示した。したがってアレンは、近代において知識がいかにジェンダー化されてつくられているかを認識する方向を指し示してきた。この知識のジェンダー化された構築は、ジェンダーの植民地性を構成する過程に関するキハーノの説明のなかでは隠されてしまった、「ジェンダー」という領域が持つまた別の側面である。

### ジェンダー化されていない平等主義

『女性の発明』においてオイエロンケ・オイエウミは、父権制が文化越境的なカテゴリとして妥当かどうかについて、問いを投げかけた (Oyèwùmí 1997: 20)。オイエウミがそのように問うのは、父権制と母権制を対比させることによってではなく、「西洋による植民地化以前のヨルバ社会において、ジェンダーは〔社会の〕組織化原理ではなかった」(Oyèwùmí 1997: 31) と主張することによってである。〔そこには、〕なんのジェンダー体系もなかったというのだ。実際オイエウミは、ジェンダーが「ヨルバ研究で重要になったのは、ヨルバの生活から生まれたものとしてではなく、過去と現在のヨルバの生活が、西洋の身体論の型に当てはまるよう英語に翻訳されたためなのだ」(Oyèwùmí 1997: 30) と論じる。ヨルバ社会に組織化の原理としてのジェンダーがあったという想定は、「西洋のグローバルな物質的支配によって容易になった、世界の記録と解釈における西洋支配の」(Oyèwùmí 1997: 31) 一事例だ。「研究者はいつも、ジェンダーを探し求めてはそれを見つける」(Oyèwùmí 1997: 31) とオイエウミは論じる。「obinrin や okunrin といったヨルバのカテゴリを『女の／女性 (female/woman)』や『男の／男性 (male/man)』とする通例の注釈は、いずれも誤訳である。これらのカテゴリは二項的に対立しているのでも、階層的でもない」(Oyèwùmí 1997: 32-3)。obin や okun という接頭辞は、人体構造 (anatomy) の種類を特定している。オイエウミはこれらの接頭辞を、解剖学的な意味での男性と女性を指すものとして翻訳し、オトコビト (anamale) ・オンナビト (anafemale) とつづめて呼ぶ<sup>(7)</sup>。重要なのは、オイエウミがこれらのカテゴリを二項的に対立するものとして理解していない点に注意することだ。

オイエウミはジェンダーを、2つの二項的に対立する階層的な社会的カテゴリを指定する支配の道具として、西洋によって導入されたものとして理解する。「女性 (women)」(ジェンダー用語) はオンナビトに割りあてられるが、生物学をとおして定義されるのではない。女性は男性、つまり標準との関係で定義される。女性はペニスを持たない人びと、権力のない人びと、公的領域に参加できない人びとである (Oyèwùmí 1997: 34)。これらの特徴のいずれも、植民地化以前のヨルバのオンナビトには当てはまらなかった。

ヨーロッパ国家体系の押しつけは、それに伴う法・官僚制機構とあわせて、アフリカにおける最も永続的なヨーロッパ植民地支配の遺産である。この時期にアフリカへ輸出された1つの伝統は、新しくうみだされた植民地公共圏からの女性の排除だった。……女はカテゴリ化され「女性」へと縮約されるまさにその過程によって、指導的役割に不適格とされた。……人体構造によって定義されあらゆる状況で男性に服従する、識別可能なカテゴリとしての女性の出現は、部分的に、父権的な植民地国家の押しつけから生じた。女にとって、植民地化は人種的劣等化とジェンダー的服従の二重の過程だった。カテゴリとしての「女性」の創出は、植民国家がまさしく初めに達成したことの1つだった。それゆえ植民地政府にとって、ヨルバのような被植民者のなかの女の指導者を認めるなど考えられなかったのは、驚くべきことではない。……国家権力の男－ジェンダー権力への転換は、ある水準において、国家構造からの女性の排除によって成し遂げられた。この構造は、権力がジェンダーによって決定されないヨルバの国家機構とは対照的だった。(Oyèwùmí 1997: 123-5)

オイェウミは植民地化における2つの決定的な過程、つまりアフリカ人の劣等化を伴う人種の押しつけと、オンナビトの劣等化を認識している。オンナビトの劣等化は、指導的役割からの排除から、資産や他の重要な経済領域における管轄権の喪失まで、とても広範囲にわたった。西洋ジェンダー体系の導入はヨルバの男に受けいれられ、したがって男たちはオンナビトの劣等化に結託したのだ、とオイェウミは注記している。このことから、非白人女性に行使される暴力への非白人男性の無関心について考えるとき、オンナビトに対するオトコビトと西洋植民者の結託という感覚を持ち始められる。オイェウミは、男性と女性が異なる水準での文化的変化に抵抗したことを明らかにしている。したがって一方で、

西洋においてフェミニズムの課題は、ジェンダーに満ちた「女性」のカテゴリから性別化されない十全な人間性へと、いかに進むかである。〔他方で〕ヨルバのオンナビト (obinrin) にとっての課題は、明らかに異なっている。というのも、社会やいくつかの圏域における一定の水準で、「性別化されない人間性」という観念は熱望すべき夢でも、気づかれるべき記憶でもないからだ。そうではなく、植民地期に押しつけられた分離的・階層的な性別の現実と結びつきながらも、それは現に存在している。(Oyèwùmí 1997: 156)

であれば、〔既存の〕ジェンダーの植民地性〔という概念〕の射程はあまりに狭いことがわかる。キハーノはジェンダーの領域を定式化するにあたって、植民地／近代ジェンダー体系の支配的な明るい側面の、大部分の観点を前提としている。〔それに対して〕わたしはジェンダーの植民地性が、ヨーロッパを中心とするグローバル資本主義のジェンダー体系の射程に関する考察からなにを隠している／禁じているのかを検証するため、その外側へ行った。その結果わたしは、キハーノが鋭く描写するようにジェンダーの植民地性〔という概念〕は人種とジェンダーの交差のとても重要な側面を示しているものの、それは被植民女性が社会生活の大部分から抹消されていることを開示するよりも、その抹消を追認してしまうと考える。それはジェンダー支配〔の理解〕を狭めることを中断させるよりも、その狭さを受けいれてしまう。オイェウミは、近代植民地化におけるオンナビトの劣等化を特徴づけるにあたってジェンダーのレンズを拒否することで、その劣等化の程度と範囲を明確にしている。ジェンダー、その植民地的なヨーロッパ中心の資本主義的構築に対するオイェウミの理解は、キハーノの理解よりもずっと包括的である。オイェウミのおかげで、再生産の管轄権に関するオンナビトの劣等化だけでなく、経済的・政治的・認知的な劣等化を捉えることができる。

## 女性統治制の平等主義

この偉大な存在を「豊穡の女神」と位置づけることは、  
あまりにその名を貶める。それは民族を矮小化し、  
女性の力を矮小化してしまう。  
——パウラ・ガン・アレン

ネイティブ・アメリカンの多くの民族を女性統治的だと特徴づけるにあたって、パウラ・ガン・アレンは先住民生活のあらゆる側面において霊的なものが中心にあり、それゆえ近代における知識の植民地性の場合とはおおいに異なる間主観性の内から知識がつくられることを強調した。アメリカン・インディアンの多くの民族は、「世界における主要な力は女性的であると考え、そのような理解が民族の全活動を権威づける」(Allen 1986/1992: 26)。蜘蛛の老女、とうもろこし女、蛇女、思索の女などが、力強い創造者たちの呼び名として挙げられる。女性統治制の民族にとっては、女性が中心におり、「その祝福、その考えなくしては何物も聖なるものとなりえない」(Allen 1986/1992: 13)。

キリスト教がしたように、この女性統治制の霊的な複数性を至高の男性の存在に取ってか

えることが、諸民族を屈服させるにあたって決定的に重要だった。アレンが提起するには、先住民〔社会〕を平等主義・女性統治制から階層制・父権制へと変えることは、以下のような「4つの目的に適うことを要する」。

1. 「創造者としての女性の優位性が、男性としてジェンダー化された創造者によって置きかえられ、取ってかわられる（広く一般に）」(Allen 1986/1992: 41)。
2. 「イロクワやチェロキー<sup>(8)</sup>におけるように、民族の基礎をなす統治の制度や哲学が壊される」(Allen 1986/1992: 41)。
3. 民族は「自分たちの土地から押しだされ、経済的な生活手段を奪われ、その儀礼体系・哲学・暮らしが依拠する探究を切りつめる／まったくやめるよう強いられる。そうしていまや生き永らえるために白人の制度に依存するようになり、父権制——つまりはそれが生き永らえることなのだが——が男性支配を要求するとき、民族の諸体系は女性統治制をほとんど保つことができない」(Allen 1986/1992: 42)。
4. 氏族の構造は「理論でなくとも事実として、核家族に取ってかわられる。この企てによって、女性の氏族 (clan) 長は選ばれた男性官僚に置きかえられる。そして、神と人の多様性への尊重に基礎づけられた非権威的な女性中心性という性質によって形成され維持される霊的なつながりは、徹底的に打ちくだかれる」(Allen 1986/1992: 42)。

したがってアレンにとって、先住民女性の劣等化は全面的に、民族生活の支配・変形と結びついている。女性統治制の破壊は、「飢餓、疫病、そしてあらゆる社会的・霊的・経済的構造の途絶をとおした殺戮」(Allen 1986/1992: 42) にとって決定的に重要である。脱女性統治制のプログラムは、目を見張るような「イメージと情報の統制」を必要とする。すなわち「民族の歴史・慣習・制度・口頭伝承を古めかしいものとして仕立てなおすことで、父権的な非先住民・父権化された先住民によって歪められ、あるいはまったくでっちあげられた民族生活の父権的な型が、諸民族の霊的・民衆的伝統へと一体化していく可能性が高められる」(Allen 1986/1992: 42)。

破壊の標的とされた先住民社会の特徴に、相補的な社会構造の二側面があった。ジェンダーの理解と、しばしば互酬性の体系に伴う経済的分配である。これらの相補的な社会構造の二側面には、対内的な女性の長と対外的な男性の長が含まれていた。〔白い長、すなわち〕対内的な長は、小集団 (band)、村、あるいは民族を取り仕切り、調和を維持して内政を管轄

した。赤い長、すなわち男性の長は、民族と部外者の仲介を取り仕切った (Allen 1986/1992: 18)。ジェンダーは生物学的な観点を主眼としては理解されなかった。ほとんどの個人は民族のジェンダー役割に収まるにあたって、「気質・性向・気性を基礎とした。ユマ<sup>9)</sup>は夢を基礎としたジェンダー割りあての伝統を有していた。つまり、武器の夢をみた女性が、あらゆる実践的な目的のために男性になったのである」(Allen 1986/1992: 196)。

オイェウミと同様に、アレンは一部の先住民男性と白人が協力し、女性の力を弱体化させたことに興味を持つ。こうした協力について考えることは、人種化された共同体における、女性と共同体に対するさまざまな形態の暴力に抗する女性の闘いへの無関心という問題を考えるとき、重要である。被植民男性を父権的役割に取りこむことで、白人植民者は強力な内部の力をつくりあげた。アレンは、父権制へ向かうなかでイロクワとチェロキーの女性統治制と先住民男性の役割がいかに変わったかを詳述している。イギリス人はチェロキーをイングリランドへ連れて行き、英国式のやり方で教育を授けた。これらの男性が、退去法 (Removal Act)<sup>10)</sup>の時代に政治参画したのである。

退去を食いとめようと努めるなかでチェロキーは、エリアス・ブディノー、メイヤー・リッジ、ジョン・ロスといった男性の指導のもと、女性と黒人の有権者資格を剥奪する憲法を起草した。チェロキーの新憲法はこれらの指導者が機嫌を取ろうとしていた合州国の憲法を模範とし、チェロキーの大義に同調するキリスト教徒と共同で、女性を動産 (chattel) の地位へと追いやった。(Allen 1986/1992: 37)

チェロキーの女性は戦争を行い、捕虜の運命を決し、男性の議会に語りかける権能、公的な政策決定に関わる権利、誰と結婚するか・結婚するかしないかを選ぶ権利、武器を手にする権利を持っていた。女性の議会は政治的・霊的に強力だった。チェロキーが土地から追われ、父権的な社会編成が導入されると、チェロキーの女性はこうした権能と権利をすべて失った。〔他方で〕イロクワもまた従属民族になると、母長の権威のもとで政治的に組織された、母を中心とし母に権利がある民族から、父権制社会へと転換した。この大業はハンサム・レイク<sup>11)</sup>とその支持者たちとが結託することで達せられた。

アレンによれば、多くの民族は女性統治制を採っていた。そのなかにはサスクウェハナ、ヒューロン、イロクワ、チェロキー、プエブロ、ナヴァホ、ナラガンセット、沿岸アルゴンキアン、モンタニエがいる。また、同性愛を認めていた 88 の民族のうち、以下の諸民族はそれを積極的に承認していた。アパッチ、ナヴァホ、ウィネバゴ、チェイェンヌ、ピマ、クロウ、ショショーニ、パイウート、オセイジ、アコマ、ズニ、スー、ポーニー、チョクトー、

クリーク、セミノール、イリノワ、モハーヴィ、シャスタ、アリュート、サック・アンド・フォックス、アイオワ、カンザス、ユマ、アズテック、トリンギット、マヤ、ナスカピ、ポンカ、マリコーパ、ラマス、キノー、ユキ、チルラ、カミアである。これらの民族のうち20には、レズビアニズムに特化した言及があった。

マイケル・ホースウェル (Horswell 2003) による第三の性 (third gender) という用語についてのコメントは有用だ。ホースウェルは、第三の性というのは3つのジェンダーがあることを意味しているのではない、と論じる。むしろそれは、性別とジェンダーの二極と袂を分かち方法だ。「第三」とは、二型的なものではない、他の可能な組み合わせの象徴なのである。時にベルダーシュ (berdache) という語が、「第三の性」を指すものとして用いられる。ホースウェルが論じるには、北米の150近くの〔先住民〕社会で男性のベルダーシュが、その半数で女性のベルダーシュが記録されてきた (Horswell 2003: 27)。ホースウェルはまた、儀礼的なものも含めてソドミー<sup>(12)</sup>が、アンデスや他の多くの南米アメリカの諸〔先住民〕社会で記録されたと述べている (Horswell 2003: 27)。ナフアやマヤも、儀礼化されたソドミーに一定の役割を割りあてていた (Sigal 2003: 104)。興味深いことに、ピート・シガルが言うには、スペイン人はソドミーを罪深いものと見なしたが、スペインの法はソドミーにおける受け手ではなく攻め手のパートナーに刑罰を科した。〔逆に〕スペインの大衆文化では、ソドミーはその実践をムーア人と結びつけることで人種化され、受け手のパートナーはムーア人に等しいものと見なされ非難された。スペインの兵士は受け手のムーア人に対する攻め手のパートナーと見なされたのである (Sigal 102-4)。

アレンは、キハーノによるジェンダーの概念化が経済と集会的権威の組織化という観点でいかに狭いかを理解させてくれただけでなく、知識生産、あらゆる水準での現実の捉え方〔そのもの〕がジェンダー化されていることを明らかにした。アレンはジェンダー的差異の構築における生物学〔の決定性〕に疑問を投げかけることを支持し、ジェンダー役割が〔生物学的に決定されるのではなく〕選ばれ夢見られるという、重要な考え方を導入する。アレンはまた、ジェンダー関係の植民地／近代的構築を特徴づける異性愛性がうみだされ、神話的に構築されることを示した。だが、異性愛性は虚構的に生物学化されているだけではない。それは強制的なものであり、ジェンダーの植民地性の全体に、新たな、広い意味で浸透している。この意味で、グローバルでヨーロッパ中心の資本主義は異性愛主義なのである。わたしは、植民地／近代ジェンダー体系の明暗両側面をうみだすにあたって行使された暴力の深さと力を理解するなかで、この異性愛性が一貫して不条理・暴力的・屈辱的で、人びとを動物へ変え、白人女性を「(白人)人種」や「(中流／上流)階級」の再生産者へ変えてきたことを見てとることが重要だと考える。ホースウェルとシガルの研究は、とりわけ植民地期・植

民地化以前のアメリカ大陸におけるソドミーと男性同性愛の理解において、アレンの研究を補完するものだ。

### 植民地／近代ジェンダー体系

植民地化以前の諸社会におけるジェンダーの位置づけを理解することは、植民地／近代のヨーロッパ中心の資本主義を構成する過程が課した社会構造変化の性質と射程を理解するにあたって、決定的に重要である。それらの変化は、被植民女性を暴力的に劣等化する緩慢で断続的な、均質でない過程をとおして導入された。導入されたジェンダー体系は全面的に、権力の植民地性に影響されたものだった。植民地以前の諸社会におけるジェンダーの位置づけを理解することは、共同的关系、平等主義的な関係、儀礼的思考、集合的な決定や権威〔のあり方〕、経済を崩壊させるのに〔新しく導入された〕ジェンダー体系がどれほどの役割を果たし、どれほど重要だったのかを理解するために欠かせない。それゆえ、権力の植民地性がこのジェンダー体系を構成したのと同じくらい、〔逆に〕どれほどその押しつけが権力の植民地性を構成したのかを理解することが重要である。両者の関係は、相互構成の論理で成り立っている<sup>15</sup>。だがここでは、植民地／近代ジェンダー体系が権力の植民地性抜きには存在しえないことが明らかにされるべきだ。というのも、人種の観点から人びとを階層化することが、この体系が存在しうるための必要条件だからである。

グローバルなヨーロッパ中心的資本主義のジェンダー体系の射程を考えるには、ジェンダーの概念を性とそれに関わる資源・生産物の統制へと狭める過程そのものが、どれほどジェンダー支配を構成しているかを理解する必要がある。この狭隘化を理解し、人種化とジェンダー化の絡み合いを理解するには、性に関わる植民地化以前の社会編成が、人びとの存在領域全体に〔植民地化以後と〕異なる意味を与えていたのかどうかを考えなければならない。そうすることで、労働、主観性／間主観性、集合的権威、性——つまりキハーノの言う「存在の諸領域」——の統制がそれ自体ジェンダー化されたのかどうかかわかるようになる。また権力の植民地性を踏まえると、暗い面と明るい面があることが、権力の植民地性と植民地／近代ジェンダー体系の共同構成の特徴だとも言えるだろう。生物学的な二型性と、ジェンダーが生物学的性別を社会的に構築してうみだす位置づけの双方を批判的に考察することは、植民地／近代ジェンダー体系の広がり・深さ・特徴を理解する手助けとなる。ジェンダー〔の概念〕を私的な領域、性とそれに関わる資源・生産物の統制へと縮約することは、イデオロギー、近代の認識的生産の問題だという感覚がある。近代では、ヨーロッパ人／白人と被植民者／非白人の人びとそれぞれにとってとくに異なる形で、人種はジェンダー化された

もの、ジェンダーは人種化されたものとして理解されてきた。人種はジェンダーに負けず劣らず神話的で虚構的なものだ。どちらも強力なフィクションなのである。

20世紀のフェミニズムの発展においては、ジェンダー・階級・人種化された異性愛性の結びつきが明示されなかった。そのフェミニズムは、傷つきやすく、心身ともにか弱く、私的な領域に閉じこもり、性的に受け身な女性、という特徴づけに抗する闘いと知識・理論の方法を中心としていた。しかし、こうした特徴づけが構築したのは白人ブルジョワの女性性のみである、ということは意識に上らなかった。実際のところ、白人ブルジョワのフェミニストはこの特徴づけから始めて、すべての女性が白人であるかのように白人の女性性を理論化したのである。

つねに白人ブルジョワ女性のみが西洋で記述される女性として数に入れられるというのは、白人フェミニストたちの歴史の一部だ。その記述から排除された女性は、従属者とされただけではない。排除された女性たちは、ある意味では白人女性と自然・幼児・小動物の同一化よりも先へ行き、動物として理解されもしたのだ。これらの人びとは「ジェンダーなし (without gender)」<sup>16</sup>、つまり性的には女性だが女性性の特徴を欠く、という深い意味で動物として理解された<sup>17</sup>。劣等な存在として人種化された女性は、グローバルなヨーロッパ中心の資本主義の過程に組みこまれるなかで、動物から、さまざまに調整されたタイプの「女性」へと変えられた。こうして、インディアンやアフリカ人奴隷の女性の異性愛的なレイプは内縁関係とともにあり、被植民者間のジェンダー関係の異性愛的な理解を押しつけることとともにあった。それがグローバルでヨーロッパ中心の資本主義、そして白人女性に対する異性愛的な支配に適う限りでそうだったのである。ところがオイエウミとアレンの著作は、たとえば被植民女性がブルジョワ白人女性に似た者へ変えられようと、白人女性の地位が延長されることはなかったのだと明確化した。被植民女性はジェンダー化された女性としての劣った地位を得たものの、それは白人ブルジョワ女性にとってその地位に付随する特権をまるで伴わなかったのだ。もっとも、オイエウミとアレンが提示した歴史は白人ブルジョワ女性に対し、その地位が植民地化以前のネイティブ・アメリカンやヨルバの女性の地位よりもずっと劣っていることを明示するだろう。オイエウミとアレンはまた、オンナビト・オトコビト・「第三の性」の人びとの関係の平等主義的な理解が、ネイティブ・アメリカンやヨルバの想像力からも実践からもなくなっただけではないのだと説明した。とはいえこうしたことは、支配に対する抵抗の問題である〔ため、ここでは詳述しない〕。

口述史も含め、あらゆる白人女性の非白人女性との関係史を消し去ることで、ホワイト・フェミニズムは白人女性を強調して書いた。ところが〔実際には両者は関係しており、〕歴史的にも現代的にも白人ブルジョワ女性は、自分たちを非白人／労働者階級の女性<sup>18</sup>とお

おいに異なる扱いを求めて競わせる生活の組織化のなかで、どのように順応するかを完璧によく知っていた。ホワイト・フェミニストの闘いは、白人ブルジョワ女性の服従に課された位置づけ・役割・ステレオタイプ・特徴づけ・欲望に抗する闘いとなった。ホワイト・フェミニストは他の誰かのジェンダー的抑圧を容認したわけではない。〔しかし〕これらのフェミニストたちは女性を白人の身体に住まうものとして理解したが、その人種的性格づけをはっきりと示したり、明確に意識することはなかった。つまり自分たちを交差性の観点から、人種やジェンダー、他の強制的な服従や支配の印が交差する地点にいる者として理解しなかったのである。そうした深い差異を認識しなかったために、連携関係をうみだす必要があるとは思わなかった。ホワイト・フェミニストはシスターフッド、つまりジェンダーの従属とともに与えられる絆を所与の前提としていたのだ。

歴史的に、傷つきやすく性的に受け身だという特徴づけは、白人ヨーロッパ女性を、女性の奴隷も含め、非白人の被植民女性と対置させた。後者はさまざまな性的貪欲さや倒錯にまたがり、いかなる種類の労働をこなすにも十分な強さを持った存在として特徴づけられた。たとえば、合州国南部で重労働をしていた奴隷女性は、傷つきやすくか弱いとは考えられなかった。

鞭を手にした老いた運転手に率いられて初めて来たとき、わたしが目にしたなかで最も大きく強い40人の女たちが一団となっていた。一様に、青みがかった格子縞のシンプルな制服のドレスを着て、スカートは膝の少し下まで伸びていた。素足だった。尊大に身を動かし、各々が肩に鋤をかけて、自由な、力強い足取りで、行進する歩兵のように歩いていた。その後ろには騎兵隊が続き、その数30人、ほとんどが男だがいくらかは女もいて、2人は耕耘用のラバにまたがって進んでいた。引き締まった身なりで警戒を怠らない白人監督者が、素早い子馬に乗ってしんがりを務めていた。……朝が明るみだすやいなや、女たちの手は木綿畑で必要とされ、あてがわれた冷えたベーコンを飲みこむべく与えられた正午の10分、15分を除けば、暗くて辺りが見えなくなるまで一時たりとも怠けることは許されず、満月の夜はしばしば真夜中まで働くのだ。(Takaki 1993: 111)

パトリシア・ヒル・コリンズは、性に貪欲だという黒人女性の支配的理解と、そのステレオタイプが奴隷制から発した起源を明確に論じている。

イゼベル (Jezebel) のイメージ<sup>(13)</sup> は、奴隷制のもとで黒人女性が、ジュウエル・

ゴメスの言葉で言えば「性に貪欲な濡れた看護師」として描かれた時に起源を持つ。イゼベル〔というイメージ〕の機能は、あらゆる黒人女性を性に貪欲な女性というカテゴリに追いやることだった。そうすることで、典型的には黒人奴隷女性によって報告されていた、蔓延する白人男性による性的暴行に、強力な論拠を与えられたのだ。だがイゼベル〔というイメージ〕は、また別の機能も担った。黒人奴隷女性を過剰な性欲を持つ者として描けるならば、増加する出生率は予期された結果ということになる。アフリカ系アメリカ人女性が自分の子どもたちに与え、黒人家族のネットワークを強めうる養育を抑圧して、黒人女性が農園で働き、白人の子どもたちに「濡れた看護」をし、白人所有主を情動的に養うよう強要することで、奴隷所有主はイゼベルとママの統制されたイメージを、奴隷制に内在する経済的搾取と効果的に結びつけた。(Collins 2000: 82)

だが白人ブルジョワの女性性の射程外に置かれたのは、黒人奴隷女性だけではない。『帝国の革紐』のなかで、大地を女性の乳房とするコロンブスの描写について述べながら、アン・マクリントックは「絶頂のエロスとしての男の旅の長い伝統」を呼びおこしている。

何世紀ものあいだ、不確実な大陸——アフリカ、南北アメリカ、アジア——は煽情的にエロティックなものとして、ヨーロッパの言い伝えのなかで形象化されてきた。旅人たちの語りは遠く離れた地の怪物的なセクシュアリティに満ち溢れており、そこでは伝説が言うように、男は巨大なペニスを競って女は猿とまぐわい、女男の乳房からは母乳が流れて戦女は乳房を切り落としてしまっていた。……この熱帯ポルノの伝統のなかでは、女性は性的な異常・過剰の権化として姿を現した。民話は女性を男性以上に、獣と紙一重なほどに乱交的な、みだらな好色に耽る存在と見なしたのである。(McClintock 1995: 22)

マクリントックは16世紀のある絵画に描かれた植民地の場面について述べ、そのなかでヤン・ファン・デル・ストラート<sup>(14)</sup>は「アメリカの『発見』をエロティックにされた男女の出会いとして描きだしている」という。

偉大な来訪者によって官能的なけだるさから目覚めた先住民女性<sup>(15)</sup>は、来訪者を誘う手を差しだし、セックスと従順さを仄めかす。……ヴェस्पッチ、その神のごとき到着は文明の種をこの女性に注ぎこみ、荒野に果実をもたらして、背景に描か

れた人食いの荒れ狂う場面を鎮めるべく運命づけられている。……人食いは女性に見え、人の脚を串焼きにしている。(McClintock 1995: 25-6)

マクリントックが言うには、19世紀には「性的な純潔さが人種的・経済的・政治的権力の統制的メタファーとして登場した」(McClintock 1995: 47)。進化理論の発展とともに、「解剖学的な基準が人間〔進化〕の階梯における諸人種の相対的な位置を決めるために探求され」(McClintock 1995: 50)、「イギリス中流階級の男性が進化の頂点に置かれた。白人のイギリス中流階級の女性が後に続いた。家内労働者、女性の炭鉱労働者、労働者階級の娼婦は白人と黒人の境界に据えられた」(McClintock 1995: 56)。同様にイェン・レ・エスピリトゥが論じるには、

ジェンダーとセクシュアリティの表象は人種主義が明確な形を取るにあたって、色濃く姿を現す。合州国のジェンダー規範は、ヨーロッパ出自の中流階級の男女の経験を前提としている。ヨーロッパ中心につくられたこれらの規範が、アメリカ人有色男女に向けられる期待の背景をなす。〔ところが〕たいていの場合、その期待に応えることは、人種主義によって前もって不可能にされている。一般的に、有色〔黒人〕男性は保護者ではなく侵略者、白人女性への脅威とみなされる。そして有色〔黒人〕女性は過剰に性的であるために、白人中流階級の女性に与えられる社会的・性的保護に値しないとみなされる。〔これに対して〕アジア系アメリカ人の男女については、白人を基礎とする男性性・女性性の文化的観念からの排除が、一見矛盾する形態を取ってきた。すなわち、アジア系男性は超男性的（「黄禍」）かつ女々しい（「モデル・マイノリティ」）者という役を与えられ、アジア系女性は超女性的（「中国人形」）かつ男性化された（「ドラゴン・レディ」）者に変えられてきたのである（Espiritu 1997: 135）。

このジェンダー体系は、ヨーロッパが（いくつもの）植民地プロジェクトを進めるなかで強固なものになった。それはスペインとポルトガルによる植民地への冒険の時代に形を取り、後期近代に成熟した。このジェンダー体系には明暗の二側面がある。明るい側面は、覇権的なジェンダーとジェンダー関係をつくりあげて、白人ブルジョワ男女の生活のみを秩序づけ、男女の植民地／近代的な意味合いをつくりだす。性的な純潔さと受動性が、白人ブルジョワ男性の階級的・植民地的・人種的地位を再生産する白人ブルジョワ女性の、決定的に重要な特徴づけである。だが同じく重要なのは、白人ブルジョワ女性を集合的権威の領域、知識生

産、ほとんどの生産手段の管轄から締めだすことだ。〔このように〕ほとんどの生活領域、人間存在の領域から白人ブルジョワ女性を退かせ、隔離するにあたっては、心身のか弱さ〔という特徴づけ〕が重要となる。このジェンダー体系は異性愛主義である。というのも異性愛性が、知識生産を含む生産と集合的権威の、人種化された父権的統制を貫いているからだ。異性愛性は、白人ブルジョワの男女のあいだでは強制的で不条理である。というのも、異性愛的な〔ジェンダー〕編成は白人ブルジョワ女性の権力・権利を著しく侵害して生産の統制を再生産することに役立ち、白人ブルジョワ女性は制限された性的アクセスをとおしてこのような〔権力・権利の〕縮減へと引きこまれるからだ。

〔他方でこのジェンダー体系の〕暗い側面は一貫して暴力的であったし、いまもそうである。〔オイエウミやアレンの著作をとおして〕オトコビト・オンナビト・「第三の性」の人びとが、儀礼・意思決定・経済にいたるところで参画していた状態からおおいに追いやられてきたことがわかってきた。これらの人びとは、動物性、白人植民者との強いられたセックス、しばしば過労死に至るほど重大な労働搾取へと追いやられてきたのだ。キハーノが論じるには、「植民地化初期の数十年における先住民の広範な虐殺を引きおこした主因は、征服の暴力でも、征服者たちが持ちこんだ疫病でもない。それはむしろ、先住民が使い捨ての労働力としてこき使われ、死ぬまで働かせられたという事実によるのだ」(Quijano 2000a、引用者による翻訳)。

植民地／近代ジェンダー体系の暗い側面を伝えるにあたってここでわたしが引用している諸研究と、キハーノの権力の植民地性〔という概念〕のつながりを示したい。これらの理論家は、植民地主義に光を当てないホワイト・フェミニストたちとは違って、人種の分断線に沿ってジェンダーが異なる形で構築されていることをとてもよく見てとっている。ある程度まで、これらの理論家はキハーノよりもジェンダーを広い意味で理解し、性とそれに関わる資源・生産物の統制だけでなく、人種化・ジェンダー化されたものとしての労働についても考えている。つまり、労働、性、権力の植民地性の結びつきを捉えているのだ。たとえばオイエウミとアレンは、植民地／近代ジェンダー体系の影響が、いかに集合的権威、資本-労働関係のあらゆる側面、知識の構築にまでわたっているか、その広がり気づかせてくれた。

植民地／近代ジェンダー体系とわたしが呼ぶものの明暗両側面を詳しく解明するために、重要な研究が行われてきており、これからまだ行われていくはずだ<sup>19</sup>。この〔ジェンダー〕編成を大胆な筆致で導入するにあたってわたしが意図しているのは、協働・参加型の研究・民衆教育の会話とプロジェクトを始めることである。そのなかでわたしたちは、権力の植民地性に織りこまれた植民地／近代ジェンダー体系の現在まで続く長い過程の感覚を詳細につかみ、〔この体系と自分たちとの〕共謀を明るみに出し、さまざまな様相で現れるこの体系

を拒否するよう互いに呼びかけて、あらためて一体となって解放の方向へと取りくんでいけるだろう。体系的な人種化されたジェンダー暴力と自分たちとの共謀を目に見えるようにし、現実の〔認知〕地図〔をつくる〕にあたって避けて通れないこの体系の認識を得るためには、社会的なもののこうした組織化〔のされ方〕を理解する必要があるのだ。

## 原注

1. わたしはこの論文全体で、合州国由来の有色女性〔という語〕を、多重の抑圧に抗する連携を示す言葉として用いる。〔とはいえ〕これは問題含みの言葉であり、植民地／近代ジェンダー体系を押しつけられた女性たちの多くにとって、必ずしも自己認識に沿うものではない。これらの女性たちはグローバルなヨーロッパ中心の資本主義下で、体系的かつ広範囲にわたる国家的・対人的暴力の標的であったし、そうであり続けている。
2. わたしはカテゴリに則った編成を印すために分類的 (*categorial*) 〔という語〕を用いている。断じて絶対的 (*categorical*) という意味ではない<sup>(16)</sup>。
3. この交差という問いについては、とても多くの重要な先行研究がある。ここではそのいくつかに言及するにとどめる。Spelman 1988、Brown 1991、Crenshaw 1995、Espiritu 1997、Collins 2000、Lugones 2003。
4. すでに言及した研究の他に、Amos and Parmar 1984、Lorde 1984、Allen 1986/1992、Anzaldúa 1987、McClintock 1995、Oyèwùmí 1997、Alexander and Mohanty 1997 をつけ加えたい。
5. アニバル・キハーノはこのトピックについて、広く、影響力のある形で書いてきた。わたしが提示する解釈は Quijano 1991、2000a、2000b、2001-2002 から集められ〔た情報に基づい〕ている。
6. 民衆教育は、このジェンダー体系について一般的にも、そして最も重要なことにその細部にわたる空間／時間的具体性においても集合的に批判的探索を行い、共同関係を変革させていく術となりうる<sup>(17)</sup>。
7. キハーノは人種を虚構として理解する。キハーノはこの虚構的性質を指し示すために、人種という語につねに引用符をつける。「ヨーロッパ人」、「インディアン」といった語が引用符のなかにあるとき、それらは人種的分类を指し示している。
8. キハーノは〔スペイン語の〕 *patrón* の訳語としてモデル (*model*) よりもパターン (*pattern*) を好む。その理由は、モデルは倣う／写しとるなにかを示唆するからだというものだ。パターンという語のこうした使い方はごちないため、わたしはモデルの語を用いる。
9. ここで人種から引用符を外しているが、〔だからといって〕わたしは人種の虚構的性質についてキハーノに異議を唱えているわけではない。むしろ、性別と異性愛の生物学的な「自然」

を含めて、ジェンダーの虚構的性質を強調し始めたいのだ。

10. この論理を紐解く分析については、わたしの *Pilgrimages/Peregrinajes* (Lugones 2003) と “Radical Multiculturalism and Women of Color Feminisms” (Lugones 2005) を参照。
11. わたしはこれらの属性がキハーノによってまとめられたところをみたことがない。そのため、キハーノが染色体配列のことを考えているのか、それとも生殖器や乳房のことを考えているのかはわからない。
12. キハーノが「権力の植民地性と社会階級分類」(Quijano 2000b) のこの節を、性ではなくジェンダーの植民地性と呼んでいることに注意したい。
13. インターセックスの個人へのジェンダー割りあてをめぐる現代の法的論争が、本稿に関連して重要であることは、キハーノのモデルが現代を含むことから明らかなはずだ。
14. McClintock 1995 を参照。
15. わたしは、この箇所を読む読者がわたしの言っていることの多くを認め、一部の読者はそれはすでに言われてきたことだと思うだろう、と確信している。それが、理論的・実践的・理論-実践的な仕事全体をとおして露わになる、この相互構成の理論-実践的認識を伴う限り、そのように思ってもらって一向に構わない。とはいえわたしがここで新しいだろうと考えるのは、交差性に対するわたしのアプローチと、権力の植民地性と植民地/近代ジェンダー体系の構成の相互性に関する理解[の仕方]だ。両者はいずれも欠かせないが、人種とジェンダーの不可分性をもたらすのは相互構築の論理だけだとわたしは考える。
16. ギリシアのポリスにおける自由な男女と奴隷の男女のアリストテレスによる区別についてのスペルマンの解釈 (Spelman 1988) が、この主張をわたしに提起した。女性を自然や自然なものへと縮約することは、被植民女性のこの人種主義的な縮約と結託することだ、と記しておくのは重要だ。ヨーロッパ中心主義を非難しながらも女性を性的なものや再生産的なものとの関係づけるラテン・アメリカの思想家は、一人や二人ではない。
17. 動物であるためにジェンダーなしだということと、概念的にすらなんのジェンダー区分もないことを区別するのが重要だ。というのも [オイェウミが論じるヨルバの事例からわかるように]、ジェンダーがあることが人間であることの特徴だというのは、万人に当てはまることではないからだ。
18. 白人労働者階級の女性と非白人女性の深い区別は、マクリントック (McClintock 1995: 4) が言及した進化の階梯において両者が占めた場所がおおいに異なることから、垣間見ることができる。
19. いまやわたしは、明暗両側面のあいだに、どちらともつかない曖昧な領域があることを明確に認識している。そこでは白人女性の奉公人・炭鉱労働者・洗濯下女・娼婦が、必ずしも性

別やジェンダーの二分法のレンズをとおしては捉えられない、曖昧に人種化されているが白人ではない存在として思い描かれ／イメージされ／構築される。〔この点については〕 McClintock 1995 を参照。わたしはこの決定的に重要な複雑性を〔自分の議論の〕枠組みに入れこもうと、努めているところである。

## 訳注

- (1) 原文では全体に「近代／植民地」「植民地／近代」の表記が混在しているが、意味に違いはなく混乱を招くだけと考え、訳文ではタイトルにある「植民地／近代」の順で統一した。
- (2) 生物学用語で、同じ生物種が異なる2つの形態・性質を持つことを言う。ここでは人間を生物学的に女／男に二分することを指している。
- (3) 原文では *patterns* と書かれている箇所があるが、原注8も踏まえ、混乱を避けるため訳語では「モデル」の語で統一した。
- (4) 原文では斜体で強調されていないが、植民地性、資本主義といった他の同格のキー・ワードが強調されているのに合わせ、訳語では強調を付した。
- (5) ここで生物学的属性とは、生物が生来持つ本質的特徴を指している。それに対して「肌の色、目や髪の形」などは外見に発現された表現型であって、遺伝子型のように生来の特徴だけでは決まらない（環境要因なども影響する）。したがって、表現型が生物学的属性を「含まない」というのはあまり正確でないように思われるものの、少なくともそれとは対比されうることである。
- (6) 西アフリカの民族で、その居住地はナイジェリア、ベナン、トーゴにまたがる。
- (7) オイエウミの議論を受けたこの節では、*female* と *woman*、*male* と *man* が区別されている。*anafemale* と *anamale* は「解剖学的な意味での人間」を表す際に「ヒト」とカタカナにする用例に則り、「オンナビト」／「オトコビト」と訳出した。以下のオイエウミの引用では *female/male* はこれに近い意味で用いられており、*woman/man* は植民地／近代的にジェンダー化された性別を指している。このため、前者はオンナビト／オトコビトと響きの近い「女／男」、後者は性別を感じさせる「女性／男性」とした。この訳はこの節のみに適用し、とくに *female* と *woman*、*male* と *man* の区別をしていないと思われる他の箇所では、基本的にどちらも女性／男性と訳出した。
- (8) イロクワ（イロコイ）はモホークやセネカなど諸民族の連合。イロクワ、チェロキーともに北米東岸側の先住民で、東岸から西へと入植が進んだ北米植民史において、ヨーロッパ入植者と入植最初期から深い関わりを持った人びとである。
- (9) 北米先住民の一民族、クツァン（Quechan）の別称。合州国西岸側、メキシコとの国境には

ど近いコロラド川沿いに居留地がある。

- (10) 1830年に制定された合州国の法律で、ミシシッピ川以東の土地に入植者を受け入れ開発・採掘を進めるために、そこに住んでいた先住民をミシシッピ川以西の割りあてられた土地へと強制的に移住させた。この結果としてチェロキーを含む諸民族が多大な苦難を被り、大移動のなかで多くの人びとが疫病や飢餓により命を落としたことは、「涙の細道 (Trail of Tears)」と呼ばれ記憶されている。
- (11) 18世紀から19世紀初頭に生きたイロクワの政治指導者・予言者で、イロクワが本格的に植民地化されるなかで伝統復興を説いた。
- (12) 『創世記』に描かれた墮落の都市ソドムに由来し、アナル・セックスをはじめとして、法的・宗教道徳的に「不自然」とされてきた性行為の総称。
- (13) イゼベルは旧約聖書に登場する王妃であり、乱交や墮落した女性の象徴とされてきた。
- (14) イタリアのフィレンツェなどで活躍した画家。別名ストラダヌス。
- (15) ここではアメリカ大陸を比喩的に指す。
- (16) ここで言う categorical は、イマヌエル・カントの定言命法 (categorical imperative) における用法のように、明瞭で絶対的な性質を意味する。
- (17) この注釈も含め、ルゴーネスは本稿で何度か民衆教育 (popular education) の語を用いている。ここで言う民衆教育とは、とくにブラジルの哲学者パウロ・フレイレが発展させた対話的な方法によって、参加者皆が教師でもあり生徒でもあるような水平的関係のもと、共同で知識をうみだし社会を変えていこうとする活動を指す。ルゴーネスは大学教育の他に、有色女性や先住民女性に教育機会を提供するニュー・メキシコの学校に関わるなど、民衆教育の実践者でもあった。

## 参照文献

- Alexander, M. Jacqui and Chandra Mohanty eds., 1997, *Feminist Genealogies, Colonial Legacies, Democratic Futures*, New York: Routledge.
- Allen, Paula Gunn, 1986/1992, *The Sacred Hoop: Recovering the Feminine in American Indian Traditions*, Boston: Beacon Press.
- Amos, Valerie, and Pratibha Parmar, 1984, "Challenging Imperial Feminism," Kum-Kum Bhavnani ed., *Feminism and 'Race'*, Oxford: Oxford University Press, 17-32.
- Anzaldúa, Gloria, 1987, *Borderlands/La Frontera: The New Mestiza*, San Francisco: Aunt Lute.
- Brown, Elsa Barkley, 1991, "Polyrhythms and Improvisations: Lessons for Women's History," *History Workshop*, (31): 85-90.

- Collins, Patricia Hill, 2000, *Black Feminist Thought: Knowledge, Consciousness, and the Politics of Empowerment*, New York: Routledge.
- Crenshaw, Kimberlé, 1995, "Mapping the Margins: Intersectionality, Identity Politics, and Violence against Women of Color," Kimberlé Crenshaw, Neil Gotanda, Gary Peller, and Kendall Thomas eds., *Critical Race Theory: The Key Writings that Formed the Movement*, New York: The New Press, 357-83.
- Espiritu, Yen Le, 1997, "Race, Class, and Gender in Asian America," Elaine H. Kim, Lilia V. Villanueva, and Asian Women United of California eds., *Making More Waves: New Writing by Asian American Women*, Boston: Beacon Press, 135-41.
- Greenberg, Julie A., 2002, "Definitional Dilemmas: Male or Female? Black or White? The Law's Failure to Recognize Intersexuals and Multiracials," Toni P. Lester ed., *Gender Nonconformity, Race, and Sexuality: Charting the Connections*, Madison: University of Wisconsin Press, 102-24.
- Horswell, Michael, 2003, "Toward an Andean Theory of Ritual Same-Sex Sexuality and Third-Gender Subjectivity," Pete Sigal ed., *Infamous Desire: Male Homosexuality in Colonial Latin America*, Chicago: University of Chicago Press, 25-69.
- Lorde, Audre, 1984, "The Master's Tools Will Never Dismantle the Master's House," *Sister Outsider*, Trumansburg, New York: The Crossing Press, 110-3.
- Lugones, María, 2003, *Pilgrimages/Peregrinajes: Theorizing Coalitions against Multiple Oppressions*, Lanham: Rowman & Littlefield.
- , 2005, Joaquín Rodríguez Feo trans., "Radical Multiculturalism and Women of Color Feminisms," *Revista Internacional de Filosofía Política*, (25): 61-76.
- McClintock, Anne, 1995, *Imperial Leather: Race, Gender, and Sexuality in the Colonial Contest*, New York: Routledge.
- Oyéwùní, Oyèrónkẹ́, 1997, *The Invention of Women: Making an African Sense of Western Gender Discourses*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Quijano, Anibal, 1991, "Colonialidad, Modernidad/Racionalidad," *Peru Indígena*, 13(29): 11-29.
- , 2000a, "Colonialidad del Poder, Eurocentrismo y América Latina," Edgardo Lander comp., *Colonialidad del Saber: Eurocentrismo y Ciencias Sociales: Perspectivas Latinoamericanas*, Buenos Aires: CLACSO-UNESCO, 201-46.
- , 2000b, "Colonialidad del Poder y Clasificación Social," *Journal of World Systems Research*, 6(2): 342-86.
- , 2001-2002, "Colonialidad del Poder, Globalización y Democracia," *Revista de Ciencias Sociales de la Universidad Autónoma de Nuevo León*, 4(7-8): 1-23.

- Sigal, Pete, 2003, "Gendered Power, the Hybrid Self, and Homosexual Desire in Late Colonial Yucatan,"  
Pete Sigal ed., *Infamous Desire: Male Homosexuality in Colonial Latin America*, Chicago: University  
of Chicago Press, 102-33.
- Spelman, Elizabeth V., 1988, *Inessential Woman: Problems of Exclusion in Feminist Thought*, Boston:  
Beacon.
- Takaki, Ronald, 1993, *A Different Mirror: A History of Multicultural America*, Boston: Little, Brown and  
Company.